

 抑留と強制移住の歴史を学ぶ

# ウズベキスタン・韓国 6日間

 タシケント・サマルカンド  仁川

2019年9月27日(金)～10月2日(水)

=感想文集=



10/1 「1940年代にウズベキスタンで生活していた日本人の記録資料館」にて

**企画・実施**

日本コリア協会・大阪 日本中国友好協会大阪府連合会 大阪私学退職者の会  
**協力** JU 観光旅行友の会

## 2019 年北東アジア平和と友好の旅に参加して

副島昭一さん

この企画旅行には5回目の参加になります。これまでの行き先は一定の予備知識がある地域でしたが、中央アジアは、私にとってかつてシルクロードの途中にあったオアシス国家という以上にはあまり具体的イメージを持っていない未知の世界とっていい所でした。

ウズベキスタンという国は中央アジアで砂漠の多い国という先入観がありましたが、タシケントやサマルカンドのある東部の方はむしろ緑も多く、アム川、シル川の上流に位置し果物の豊富な地域で、特急列車の車窓からも果樹園が所々に眺められました。この特急列車、タシケントからサマルカンドまで2時間余ノンストップ、広軌で4列のゆったりした座席でした。アム川、シル川は世界史の上でも有名な河川ですが、この両河にはさまれた地域にウズベキスタンがあることも今回初めて気がつきました。アムダリア川、シルダリア川とも呼ばれており、こちらの方が正式な呼称かと思っておりましたが、「ダリア」が川の意味であることも今回知り、そうするとアム川、シル川の方がむしろ正しいのかなと思います。この2つの川はかつてはアラル海に流れ込んでおり、アラル海は世界で4番目の面積を持っていましたが、綿花栽培のためのアム川灌漑により、その水がアラル海に流れ込まなくなり、今ではアラル海のかなりの部分が干上がり砂漠化してしまっているということでした。

ウズベキスタンの位置する地域はかつて玄奘が長安からインドに旅したときに通過したところですが、今は仏教遺跡はわずかに南の方に残っているだけになっているということです。タシケントのウズベキスタン歴史博物館で中国人のツアーを案内していたガイドさんが、仏教遺跡の展示の前で比較的丁寧な解説をしていたので、思わず足を止めて聞き入ってしまいました。

イスラム教のモスクの青色のドームを見るのも今回の旅行の楽しみでした。サマルカンドの中心に位置するレギススタンス広場のウルグベグ・メドレセのミナレットは華麗なタイルの装飾の見事なドームとミナレットでしたが、ミナレットが傾いているとしか見えませんでした。目の錯覚とも思いましたが、周囲の建物と対比してもどう見ても傾いています。天文学や数学の精緻さから見て設計

ミスとは考えられず、何らかの意図があったのだらうとしか思えません。あるいは創設時は傾いていなかったのが、修復時のミスで傾いてしまったのか、いずれにしても謎が残りました。

高麗人墓地とコリアン合同農場を訪れるのは今回の旅行の趣旨にもっとも深く関わっていました。案内された高麗人墓地は郊外の共同墓地の中にありましたが、昨年サハリンで見た墓と同じように写真を彫り込んだ墓が印象的でした。合同農場のキムピョンファ博物館では、移住させられてきたこの地は、当初人の住まない荒野でその開拓の困難と苦心がうかがわれました。沿海州の故地から遠く離れたこの地に強制的にほとんど着の身着のまま強制的に移住させたのはソ連政府でしたが、その原因をつくったのは日本の植民地支配だったことは銘記しておくべきことだと改めて思いました。

日本人墓地を整備して桜の木を植えさせたのが中山恭子ウズベキスタン大使であったということでした。国のために戦った英霊だから墓地を整備しなくてはならないという認識だったのでしょうか。日本の侵略戦争に駆り出された戦争の犠牲者だったという認識はこの人にはなかったことでしょうか。憲法9条を守ることが抑留で亡くなった人たちの犠牲を生かすことになると思う私には、改憲論者の中山恭子はしっくりきませんでした。この人と対蹠的立場に立つ孫崎享は独立後のウズベキスタンの初代大使を務めました。その考えの違いを想起します。

サマルカンドで見たパンはサマルカンドパンとガイドさんは言っていましたが、前に新疆ウイグル自治区のカシュガルで食べた「ナン」とそっくり、後でお土産に駅の売店で購入しましたが、看板に現地語で「ノン」と書いてあったのを見て、やはり元は同じ系統の砂漠用の保存食だったと納得しました。ともあれ、今回もテーマ旅行にふさわしい得ることの多い旅でした。